

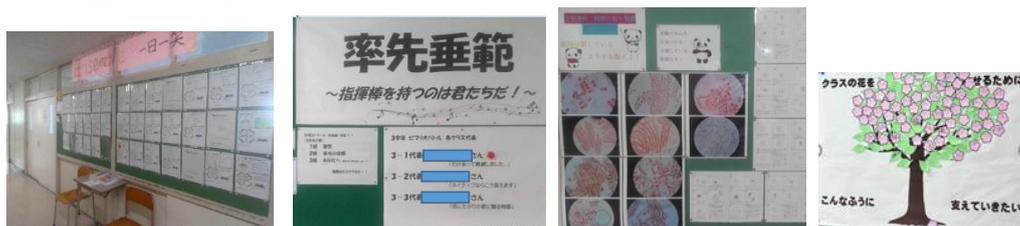
新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

○掲示物を活用した居場所づくり

教員が生徒の輝く場面を認める取組を進め、学年で共通認識の下、掲示や教室整備を実施した。生徒作品はファイルで掲示し、学年目標を明示。理科の観察記録や社会の新聞クイズなど学習の成果や、「クラスの花」等の学年企画も掲示し、生徒の活動を可視化する工夫が見られた。



【取組2】(B中学校)

○少人数を生かし、全学年・学級で取り組む学校全体のきずなづくり

B中学校では、献立づくりから買い出し、調理、弁当箱詰め、片付けまでを子ども自身が行う「おべんとうの日」(年3回)に取り組んでいる。みんなで食べることで友達のお弁当を見て互いの努力を称え合う姿が見られた。



【取組3】(B中学校)

○コラボ授業・SDGs ラジオの取組

数学と美術のコラボ授業に力を入れ、生徒が教科を横断的に学ぶ機会を設けていた。あわせて、朝と昼の「SDGs ラジオ」や総合の時間のビンゴ学習会を通じて企業活動を理解し、情報を整理・分析・発表する取組も行った。これらにより、生徒が主体的に学び、自ら情報を集め表現する活動が習慣化している。

【取組4】(C中学校)

○意識調査と四視点を生かした研修

不登校対応巡回教員が生徒指導上の視点を意識した授業の推進を提案すると、授業改善に積極的に取り組む姿勢が見られた。意識調査の分析後には、教員チェックシートを用いた授業観察の方法を例示し、相互評価や校内研修で活用できるようにした。これにより、四視点が不登校の未然防止につながることを先生方に理解してもらうことができた。

多様な学びの場を確保する取組

〔「早期支援」及び「長期化への対応」の取組〕の推進

支援会議（D中学校）

○毎週、校内委員会を開催
支援が必要な生徒を名簿化して校内委員会で組織的に検討するとともに、SSWが毎週、校内委員会に参加して多角的な支援を進めている。不登校対応巡回教員は他校の事例を共有し、生徒の家庭訪問の計画も協議することで、不登校生徒の状況も把握できている。

アウトリーチによる支援（A中学校）

○担任の継続的家庭訪問による安心感
家庭訪問の継続で安心感が生まれ別室登校につながった。担任の週1回の訪問で信頼を築き、進級時に登校を希望。午前利用から給食へ広がり、現在は終日学校で過ごせている。担任の支援が生徒の登校意欲につながった例となった。

校内別室における支援（E中学校）

○地域による「学びを楽しむ校内別室づくり」
支援員の経験と知見に基づく分析を校内委員会や校内研修で活用している。また、休みはじめから1週間以内に校内委員会で対応を検討し、校内別室につなげるなど早期の対応を行った。校内別室では、知力・気力・体力を育む個別支援や小集団支援を行っている。



デジタル機器を活用した支援（B中学校）

○授業支援ツールを利用した連携
校内別室の利用者の登下校状況をリアルタイムで把握できるように、校内別室のPCに入力された登下校情報が、即座に職員室のテレビに映し出されるシステムを構築し、校内別室と職員室間の情報共有を円滑にした。この結果、教員が校内別室に頻繁に訪れるようになった。

関係機関との連携（D中学校）

○支援機関の共有
不登校対応巡回教員がSSWやSC、巡回校の不登校担当者と連携する中で、学校での支援が行き詰まった際には、教育センター、子ども家庭支援センター、教育支援課等の外部機関の活用を校内委員会で提案した。これにより、多様な支援ルートが確保された。

成 果

校内外の支援機関と連携し、教員の意識統一を図り、組織的な支援体制を構築した結果、巡回担当校での「どこにもつながらない生徒」は0人となった。

課 題

不登校対応巡回教員の活用について学校の理解を深めていく。引き続き、学年や担任を支援することで不登校支援の充実を図っていく。